

1. 異変にあっても大したことないと思いたくなるのは・・・

よく言われるのは、私たちには普段と異なることが起きていても自分は大丈夫、関係ないという心理が働くといわれています。確かに、東日本震災の時でも津波の情報があつたにもかかわらず行動を起こさない人たちがいたことを記憶しています。このような心理になったりするのは災害に限らず聞いたり経験もしています。根拠はないのですが自分は大丈夫、周りがとる行動についつい合わせてしまうあるいは自分の考えに合致したものだけに注意がいくといったことだと思います。特に災害発生時に顕著になるものでリスク認知バイアスといわれているものです。

これらのことは、何の確証がなくても、何とか自分を確実にしたいというか自信を持たせたいというものかもしれません。しかし、この心理が自然災害では時に命取りになる事がこれまで多数の事例で示されています。これらの、いわゆるバイアスには様々なものがあるようで、災害発生時になぜそうなるのか、どうすればそのような罠にはまらないのかを日常の暮らしの中で身に着けることが大切だと思います。まずは、正しい知識が必要で、これまでの経験や風聞を洗い出しておく必要があります。これには地域での研修会などで学ぶことが一つの方法ですが、学校教育の中で是非とも自然災害の基礎づくりを進めてほしいと思います。つまり、何が起きるとどうなるのかという判断力が必要です。

昨今は情報があふれる時代ですので、災害が発生すると情報が様々な形で洪水のように押し寄せてきます。情報の中には危険なものもありますが、特に注意したいのは、自分に都合の良い情報を選択してしまいがちだということです。これも先に述べた心理行動になるのかもしれません。正しい知識と適切な情報にもとづいて適切な行動をするということが命を守ることにになります。そのためにも、自然災害への備え、つまり地域のリスクへの理解、よそで起きた事例などに関心を持ち続けて、臨戦態勢が必要だと思います。日本列島の位置、最近の気象の変化、インフラの集積など自然災害に絡んでくる要素は広域化し多様化していることから、これまでとは異なる災害の発生形態を見せています。発生そのものは抑止も抑制もできませんが、人命の喪失や被害を最小にすることは可能です。何時起きるかわからないがゆえに、備えておくべきことがあるということになると思います。状況の発生から避難するまでをイメージして、ひとまとめにした手順を作っておくということで、急な変化に対応できる能力を持つことが必要です。

実際的には、地域にある市民センターのようなところで、防災講座を定期的を開催するとか災害経験者などの経験を聞くというような機会を持てるように提案するというのも大事なのではないかと思います。忘れていくのが自然災害でもありますし、突然やってくるのも自然災害であることを様々な機会に思い出して、備えていくことが大事なことです。減災の初めは、チェックだとも言われています。自分の被災シーンを想像し、その時何ができるのか、するのかが思い浮かべることが、とても大事なことで考える間もなく素早い行動ができるように手遅れにならないことです。それには、異変時にありがちな心理に対して、少しでも冷静に客観的になるには防災への関心を重層化させる必要があります。